

# 舟運からの都市の読み方

# 協働フィールドワークマニュアル

陣内研究室では今まで多くのフィールドワークを実施し、都市の異文化にふれ、フィールドノーツをまとめ、数々の研究成果を挙げてきました。それらは専門家の方々による計画的な調査でもありました。ところが、本センタープロジェクトで行った数回のフィールドワークでは、「面白そうでも、面倒なことはわからない。」というフツウの人々が助っ人として数多く参加いただきました。その過程で、一般の方々が仕事を分担し、短

期間効率的で都市を読むための調査を行うという「参加型フィールドワーク」の手法が生まれてきました。

そこで、4月に愛知県半田市で行われたフィールドワークに、調査にはまったく素人の当センター研究員を同行させました。彼が見た「陣内チーム流協働フィールドワーク」の一端をここで紹介します。



## 《調査地》

第1日：鳥羽（三重県）～青峯山～鳥羽日和山～大湊

第2日：鳥羽～<船で移動>～豊浜（愛知県）～内海～大井

第3日：半田～<船で移動>～亀崎～半田



どういうコースで回ろうか？ポイントはこの車中打ち合わせの前に、2度、コアメンバーで調査計画打ち合わせを行った。

## 2 事前打ち合わせ



まず準備 最初に始めたことは調査地の古い地図と、史料集め。ここで大きな力となったのが、地元の史料館・博物館だ。「半田市立博物館」と「武豊町歴史民俗資料館」を訪れ、学芸員の方に気軽に尋ねてみた。調査目的をお話すると、誰に話を聞けばよいか、どの地を調査すればよいか、関連史料・文献がどこにあるか丁寧に教えてくれる。予想以上の成果。すでにフィールドワークは始まっている。

## 1 準備

まずいろいろ聞いてみることに。大湊（三重県）の町で一番最初に飛び込んだ雑貨屋さん（これがまた、昭和四十年代以前には全国にあつたようないい雰囲気のお店！）。ご主人に昔の話をうかがっていると、アイスクリームを配達にやってきたおじさんが、「それなら、あそこ、あそこを見るといいよ。俺が若い頃は・・・」と貴重な話を練り出していた。結局、生きた情報は、人との出会いの中からしか取材できないという事実を再確認。

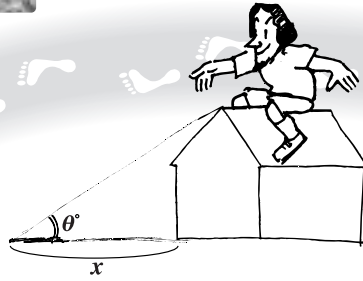
## 3 インタビュー



## 4 実測

建物毎の幅や高さを測っていく。左上の写真は距離計器で測っているところ。以前は巻き尺で測ったそうだけれど、今は、超音波の反射で距離が自動的に測れてしまう。

高さは、少し離れて正面から歪みなく写真を撮ればほぼ正確にわかる。また、目標物までの距離と、目標物が見える角度を測る。そうすれば、高さは自ずと分かる。高校生の時に、三角関数でやったような・・・ほとんど忘れていましたが。



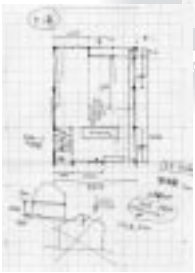
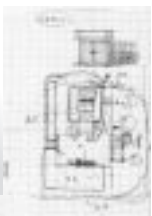
## 5 連続立面写真

特徴のある町家の一角などを記録に残すために、連続立面写真を撮る。これは、撮影者が被写体に対して正面に構え、撮り終えると撮影者が横に移動していく。道幅が狭いと上下に2〜3分割しないと写真に収まらない。これを、後でコンピューターでスキマニングし、横につなげていく。



## 6 スケッチ

カメラですべてを撮影するには膨大なフィルムと時間が必要となる。ここで大きな力を発揮するのがスケッチ。特徴ある建物を描いたり、時には連続立面写真と同じ要領でスケッチを描いていく。ここで大事なことは、細密に描写するリアリズムではなく、建物の全体構造と特徴を解釈して過不足なく描くこと。本人が、町の雰囲気を感じた眼差しで描いた絵は、心に強く訴えかけてくる。



## 7 合同報告会

最後に、みんなが集まり、各自が行った作業と、調査を通じて感じ取った点を報告しよう。みなさんの目の付け所が実に鋭い。一つの場所を苦労して協力して調査している内に最初の調査意図がすぐに共通に理解され、さらに、それが参加者ごとの見方に深化している。これがまとまると、さぞ厚みのある記述になるだろう。





# 町を読む、動きのポイント!

## 港・道路・水路の 全体構成を見る

瀬戸内のように、港に平行して町が伸びている場合もあれば、大井（愛知県）の様に港に対して垂直に伸びている場合もある。水路と道路の構造が、町を特徴づける一つのポイントだ。



## 船から 眺めてみる

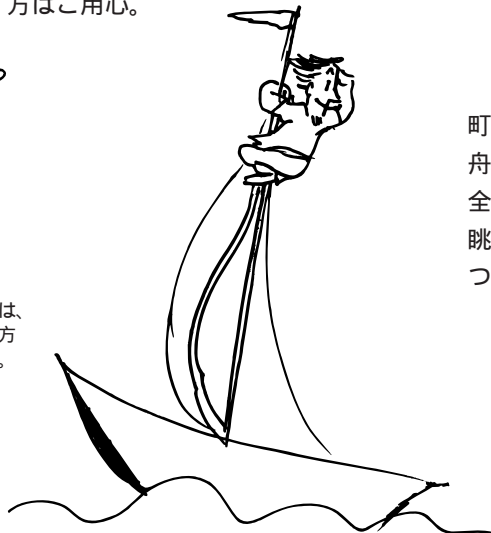
船に乗って川や海から町を眺めて見ると、意外な発見がある。舟運から見た都市の表と裏、市場の立地などが腹の底から納得できる。但し、船に弱い方はご用心。

## 高台から 町を眺望してみる

鳥羽市の日和山（ひよりやま）から町と海を眺望した。昔はここを目印に、舟が入港してきた。こうした日和山は全国の港町に散らばっている。上から眺めると、町の広がり・地形をすぐにつかむことができる。



鳥羽の方位石。  
風待ちの港町には、日和山の頂上に方位石が置かれた。



陣内チーム

フィールドワークに同行して

すべての町に通じる

異文化体験

建築物のフィールドワークは初めてだし、漁船に乗るのも初めて、水から都市を見るってどういうこと？ 初めてづくしの体験を振り返って気づくのは、いかに私が大きなスケールの都市にドップリと浸かって暮らしてきたかということだ。

これは、実際に昔の港町を歩いてみるとよく分かる。少々曲がった中世の道や、所々に残る長屋形式の町家、突如出現する井戸の広場。そこはほっとする空間だ。ヒューマンスケールの町といっても良いだろう。

しかし、そこが大きな道からはずれ、近代的発展から取り残されたために残っているという事実。それを、さびれているとるか、豊かさとするか、ゆとりとするか、町の財産とするか。町はフィールドワーク参加者の解釈に開かれた体験の場だ。

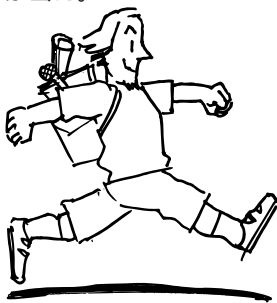
おそらく、このフィールドワークに参加した十数名のみなさん





## 町を歩き 体験してみる

町並みもさることながら、陣内教授の言う「迷宮空間」に入り込むと、わくわくする。曲がりくねった中世の道、井戸のある広場、カーブを描いた町家…。この後、東京の我が家に帰ると、ため息が出た。



伊勢の造船で栄えた大湊にも、町のエッジに祠が置かれている。



## 市場、寺社、祭り どのような営みが なされてきたのが 聞いてみる

市場の位置、宗教空間の位置、祭礼などについて町の古者にうかがってみる。亀崎（愛知県）のフィールドワークで、お昼を食べに入った食堂に、砂浜に出た山車の写真が額で飾られていた。聞くと、知多半島では、いくつか山車が出る祭りがあるそうだが、砂浜に出して水につかるのは、この亀崎だけとのこと。町の5地区がそれぞれ山車をもっていて、これをひくために、戻ってくる若い人も多いとのこと。



## 建物を見る

魅力的な建物、それがどのような歴史をもっているのか想像してみる。この写真は、大井で現在も病院を営んでいるお宅の建物。不思議な建物だ。その並びには、小さな出張所があった（写真下）。よく見ると、出張所の入り口には、建物に不似合いな御影石の柱が両脇に建っている。この広い間口だと、昔は、立派な建物が建っていたのではないだろうか...?あるいは門柱を移したのかもしれない。町のおばあさんに聞いてみると、ここは昔は路線バスも走っていた大井の目抜き通りだったらしい。

も、みな、それぞれの日常感覚を  
問い直され、異文化体験を味わっ  
たと思う。  
あまりに面白かったので、私は  
東京に戻った後、水とはまったく  
関係のないと思われる多摩ニュー  
タウンを歩いてみた。確かに運河  
も橋もないし、土地の伝統も三十  
年しかない人工都市。でも、小川  
のせせらぎに群がる子ども達や、  
斜面にへばりついたマンションか  
ら階段を上り学校に通う学生、人  
工的に造られた池にまたがる、移  
築された古い橋、何かしら水に関  
係したものがしつらえられている  
ここにも違った形で、水の都市の  
文脈を感じることができた。  
自分の足で歩き、都市や町を読  
みとる方法は、歴史の古い町だけ  
ではなく、すべての町にも通じる  
もの。家族、母親のグループ、友  
達同士などで、自分の町を歩いて  
探検してみると、かなり盛り上が  
ると思う。現代の水の文化を体験  
できるかもしれないし、それは仲  
間とまちの魅力を共有する第一歩  
になるかもしれない。

フィールドワーク素人研究員N